

交通安全教育資料



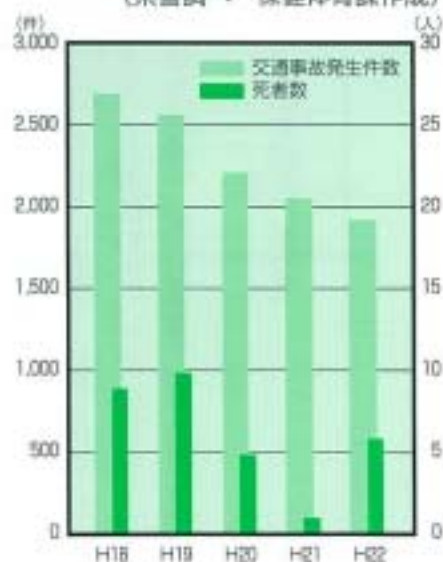
特集

高校生大会

こんなことあんなこと

県内高校生の交通事故発生件数 および死者数の推移

(県警調べ・保健体育課作成)



事故件数さらに減少

自転車は横ばい、歩行者は増加

県警によると、昨年一年間の県内高校生の交通事故は前年よりさらに一三三件少ない一、九五九件となりました。これは、ピークであった平成四年の約三分の一であり、平成十五年より八年連続しての減少となっています。状態別死者数の減少の内容を見ると、そのほとんどをバイクの事故が占め、自転車は減少しているもののほぼ横ばいの状況です。歩行者については前年より二十三件も増加しています。

また、死者については、前年より五名増加の六名で、内三名はバイク事故によるものでした。

さて、昨年四月より、みんなの交通安全教育推進運動「スタートかながわ」が始まりました。これは、それまで二十年間すすめてきた「かながわ新運動」を発展的に継承したのですが、長年にわたる各校の取組が、近年の交通事故の減少をもたらしたことは間違いありません。しかし、その反面、さほど減らない自転車事故や歩行中の事故の増加といった課題も残されています。今後も、各校における交通事故防止に向けた弛まない取組が求められています。

高校生大会 こんなこと あんなこと

平成22年4月に、みんなの交通安全教育推進運動「スタートかながわ」が始まり、一年が経過としていっています。高校だけでなく、小学校や中学校、地域・保護者と協力・連携し、みんなの交通安全として、ともに手を携えて、生涯にわたって交通安全を安全に生きていく力を身につけていこうという運動です。かながわ新運動を継承・発展させ、「遵法精神」「生命尊重」「思いやり」の理念をもとに取り組んでいます。

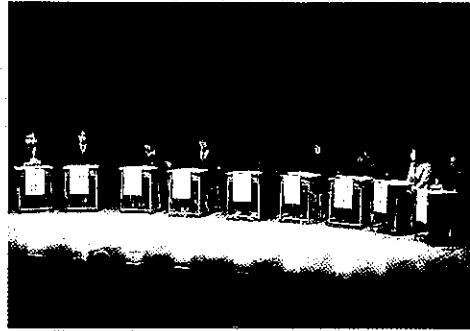
今回は「スタートかながわ」初年度に開催された各地区の交通安全高校生・PTA大会の取組を紹介いたします。

「スタートかながわ」って何？

横浜北地区でシンポジウム

横浜北地区では、今年度から展開されている「スタートかながわ」をテーマとしたシンポジウムが開かれました。発表者は自己紹介もそこそこに、司会者から「スタートかながわ」を知っているか？ふだん交通安全についてどんな意識をもっているか？とつめよられ、会場は最初から全開モード。参加者の反応から「スタートかながわ」についてまだまだPR不足であることがわかりました。

また、来賓兼シンポジウムの東海大学大越先生から「近年は自転車による事故が大変多く、防止に向けた取組が必要なこと、高校生も将来を考えて、いまから



交通安全の一員としての自覚をもつことが大切であること。」などの指摘をうけました。学校、家庭、高校生それぞれの立場から意見を述べ合い、印象深いシンポジウムとなりました。

テーマに沿った演劇を作ってみよう

高校生大会を実施するに当たり、まずテーマを決めます。次に、標語やポスターなどがつくられますが、さらにそのテーマに沿った演劇をつくることもひとつの良策です。

生徒だけでなく教員、保護者も出演すると演劇のキャストや役割分担の幅が広がり、生徒とPTAの共同開催の場合には特に有効な企画になります。

横浜南地区や川崎地区では、テーマに沿って非常に優れたシナリオが書かれ、会場は賞賛を越えて感動に包まれました。

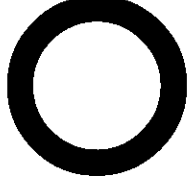


「O×クイズ」はいかがですか

横浜南地区では、会場参加型の企画として「O×クイズ」が行われました。参加者に交通法規の正誤やマナーのあり方、交通安全の知識を答えてもらうものです。発問者と参加者の双方のやりとりができます。最後に発問者が解答・解説を行い、交通安全意識の啓発を図っています。こうした企画は、学校でも実施することが可能です。

問題3
この標識のある道路では30km/h以上の速度で走行しなければならない。

答え



<解説>

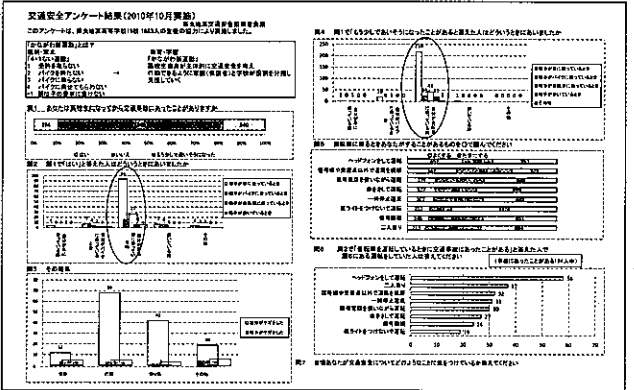
最低速度を表す標識なので30km以上で走行しなければいけません。

長年続く交通安全アンケート

県央地区の高校生大会では厚木商業高校が、15年近く同じ内容で実施しているアンケート調査の集計、発表をしています。地区の各高校2クラス程度を抽出して実施してきたものです。

ず、個々の生徒達が交通安全に向けて向き合う場面として、LHRなどでのこのようなアンケート調査を行ってみてはどうでしょうか。

調査は生徒の意識や実態を知る重要な手がかりになり、その分析から生徒の安全を守るために気をつける点などが明らかになっていきます。しかし、アンケート調査の意味はそれだけではなく、各生徒が回答していくことと自体、実は生徒自身に交通安全を考えさせる契機にもなっています。大会での発表のみならず





横浜中地区

県立高校女子生徒

弟の事故によつて……

毎日のように色々な場所で交通事故が起きています。皆さんの中には、目の前で交通事故を見たことがある人も少なくないでしょう。私もその中の一人です。そして、私の見た交通事故の被害者は私の弟でした。

今から六年前、梅雨も目の前という6月上旬のことです。私達家族は、1泊2日で家族旅行に行くために、慌しく準備をしていました。早く準備の終わった兄と私と弟は、外へ出て遊んでいました。

少して父も準備を終え、旅行のために車の掃除をしていました。父と兄は洗車に夢中で、私も遊ぶことに夢中になっていました。家の前の道路は比較的狭く、交通量も少ないので、「交通事故」なんて誰も想像していなかったでしょう。きつと皆、そう思っていたから弟から目を離してしまっていたのです。目を離してしまつてからどのくらい時間が経っていたかは覚えていません。私が弟を確認したのは、大きな音と、聞いたこともないような弟の喚き声が聞こえてきてからでした。その時見た弟は、トラックの下に脚だけ踏みつけられ、脚が血だらけでした。

当時小学校3年生だった私にも、何が起きたのか理解できませんでした。私の中で少し時間が止まったように感じました。初めて見る光景に頭の中が混乱し、動揺してしまいました。父は弟

を引き上げ、ボツボツと滴る血を無視して家中へ連れて行きました。きつと動揺していたのは私だけではなかったでしょう。弟を抱く父の腕がかすかに震えていました。私と兄があたふたしているとき、父は「タオルを持ってこい」と叫びました。タオルを持っていくと、母が電話していたのか、救急車が来て、血だらけの弟と父は乗って行きました。

そして病院に運ばれ、手術を受け、弟は2ヶ月の入院となりました。4歳だった弟には、きつと苦しい入院生活だったと思います。一日に何度も消毒をされ、その度に泣き叫んでいました。ついこの間まで元気に走りまわっていた弟を思うと、本当に辛かったです。毎日の点滴のせいで細い腕はあざだらけになっていました。リハビリに1年かけ、やっと普通に歩けるようになりました。それでも痛々しい傷痕は残り、通っている保育園に行けば、みんなに物珍しそうに何度もその傷痕を指摘されて、弟は

きつと傷ついていたにちがありません。6年経った今は、傷痕は薄くはなりませんが、後遺症が残っています。交通事故というのは、自分には関係ないと無視できるものではありません。いつ、誰に起こってもおかしくないのです。

事故を起こしてしまった加害者本人、そして事故に遭ってしまった被害者は誰よりも辛いです。身体にできた傷も、心にできた傷も、そう簡単には消えないと思います。そしてその家族も同じくらい傷つきます。

だから、そうなる前に一人ひとりが交通安全に努めていかなければならないと思います。自分には無関係だ、自分は大丈夫、そう思っている人に限って起こってしまうのではないのでしょうか。私達のように……。

交通事故は、いつ、誰に起こってもおかしくないことを忘れないでください。そしてたくさんの方が傷つくことも忘れないでください。

公開ヤングライダー 平塚で開催される

去る2月14日、湘南平塚モータースクール(平塚市代官町)にて、平塚市交通安全対策協議会主催によるヤングライダースクールが開催され、県内の高校教員を対象に公開されました。

この日は、平塚地区から県立高校生38名が参加し、バイクの実技講習だけでなく、教室での座学による講習、さらに佐川急便安全推進課によるトラックの死角体験が行われました。寒空にもかかわらず、生徒たちは神奈川県警や佐川

急便の指導のもとおよそ二時間にわたる講習を熱心に受講しました。

さて、近年、高校生のバイク事故減少にとともに、県内でのヤングライダースクールの開催が減少傾向にあります。しかしながら、バイクによる事故が重大な結果を招きやすいことを考えると、ヤングライダースクールを実施する意義はまだ十分にあると言えます。